

『ユリシーズ』18挿話におけるモリーの過去

ジブラルタル・ノスタルジア・異種混雑性

岩下 いずみ

本発表ではジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』(1922)第18挿話に着眼し、主人公レオポルド・ブルームの妻モリーの過去を再考察し、彼女が思い起こすジブラルタルの描写・特徴から作品全体に通底するノスタルジアと異種混雑性を分析することで、作品が紡ぐ未来像を省察する。

1. なぜジブラルタルなのか

ジョイスはジブラルタルを訪れず旅行記や人名録を元に作品を書いたが、ダブリンとジブラルタルが重なり、ずれ、ブルームとモリーの記憶もまた重なり、ずれることが Sam Slote によって指摘されている (“All the Way from Gibraltar”)。ジブラルタルはイギリスの植民地的存在という特徴によっても、アイルランドに重ね合わされる。William Gibson はジブラルタルの軍事的側面を論じながら、19 世紀後半には文学的側面も打ち出されるようになった点を指摘する (258)。スペインによる 1492 年のユダヤ人追放令により、ジブラルタルには独自のユダヤコミュニティが形成され、様々な人種が混雑していた。これらの観点からジブラルタルとアイルランドの重ね合わせ、ジブラルタルのユダヤ性、異種混雑性が浮き彫りとなる。

モリーの父はアイルランド人のイギリス軍人で、母親はおそらくユダヤ人である。母親がユダヤ人であればユダヤ人とみなされるという伝統から判断すると、モリーはユダヤ人とされる。モリーは 15 歳までジブラルタルで過ごし、父親の退役に伴ってアイルランドに父子で引っ越し、18 歳でブルームと結婚する。モリーのジブラルタル生活での母親関連の言及は少なく、母娘間の関係が感じられるような直接的表現はない。ここにモリーとその娘ミリーの現在の関係の基盤、すなわち伝統的な母娘像の枠にとらわれない関係性の背景がある。Suzan Bazargan はモリーがジブラルタルという軍事性が強い土地で特権的な軍人の娘であったことで、いわば支配者側の立場で、父親側の視点を内在化していたのではないかと指摘し、このような状況から、植民地で育ったことによってモリーが二律背反性を伴うと分析する (120)。モリーの当時の恋人マルヴィも軍人であるため、父親も恋人もイギリス軍人のモリーには親英的要素が伴い、彼女はかなり複雑な側面をはらんだ存在であることが示唆されている。

2. モリーとブルームのノスタルジア

ノスタルジア (nostalgia) は失われた故郷や時代を懐かしむことを包含する。モリーは特に土地にまつわるノスタルジアを持ち、それは幸せなイメージを伴い、戻ってこないジブラルタルでの少女時代を懐かしみながら娘ミリーに重ね合わせている。ここで特に着眼したいのが、ブルームとモリーは両方ともユダヤ人、移民的な存在だが、ブルームはアイルランド生まれのいわば「土着」の移民二世、モリーは外国で生まれたアイルランド人とスペイン人のルーツを持つ「帰国子女」という点である。国家間の移動を伴いダブリンで生きている帰国子女モリーには、先述した二律背反性を含む複雑な人物造詣がなされている。そしてあえて主人公のブルームに移民としての移動、自らの移住体験という要素を与えなかった点、配偶者モリーが複雑な異質さをアイルランド社会で帯びている点は、夫婦のあり方にも影響している。ジョイスはこのような移民や移住の多様性をブルーム、モリー、そして夫婦に取り込んでいる。

ノスタルジアの起因の一つである「喪失体験」、特に家族の喪失は、ブルームとモリー両者に共通する。モリーは母親を喪失していることが示され、ブルームはスペイン語を忘れてしまったモリーを嘆く。人口の大半がバイリンガルであるジブラルタルにおいて、モリーが父親から英語、母親からスペイン語を習得したと想定すると、母親不在によってモリーがスペイン語を習得できなかったことが推測できる。この母語 (mother tongue) の喪失はしかし、Bazargan によるとある意味で従来の意味での故郷の枠組みを持たないモリーの語りとなり、新しい伝統や歴史概念のあり方を提示している (128) と分析され、新たな肯定的側面も見出すことができる。

ブルームもまた、モリーのようにかつての幸せな記憶、すなわちミリーが幼い頃の記憶を想起する。そこから、ミリーが現在携わる写真業を想起し、自死した父親が関わっていたダゲレオタイプ (銀版写真) アトリエに思いを巡らす。写真はブルームの家系にまつわるもの、いわば家業であり、記憶に留めるために写真を残すことは、ノスタルジアの発端となる行為と言える。彼は祖父や父の写真を大切に保管しており、移民であり自死家族を持つブルームが写真と関連して特徴づけられている点は、本論考に関して重要である。一方モリーは、恋のテクニックとして記憶を操作し、相手を惹きつけるために写真を用いる。彼女は婚前、ブルームに貸した本にマルヴィ

の写真をわざとはさむ行動をとる。このようなモリーの行動は、交際相手パノンに自分の写真入りのロケットを渡したミリーのそれとの符号を感じさせる。ブルームにとって写真は主に記憶や家系につながるノスタルジアを感じさせるものだが、モリーやミリーの写真に関するエピソードから、過去の写真が後の関係構築、いわば未来への橋渡しの機能していることが想像される。これらをブルーム、モリー、ミリーの系図において捉えると、彼らが過去だけにとらわれずに、それぞれの未来像を展望しているとも言いかえられるだろう。

3. ブルーム一家の異種混雑性

ジブラルタルはヨーロッパとアフリカの境目にあり、異種混雑性の象徴のような場所である。移民二世のブルームはダブリン生まれで、モリーはジブラルタルで生まれ育ってアイルランドに移住している。これらを踏まえてミリーに結晶する異種混雑性を分析する。

モリー側からの娘ミリーへの継承は“Molly. Milly. Same thing watered down.” (U 6. 87)というブルームの思考にも表れている。モリーは若い頃の自分とミリーを重ね合わせるが、ミリーは 14 歳でマリンガーに移住し、モリーもほぼ同じ歳でアイルランドに移住しているため、ミリーの巣立ちを自分のそれと重ね合わせているのだろう。ミリーは手紙の中などでブルームを“Papli” (U 4. 397) (イディッシュ語由来の「父」) と呼ぶが、この呼び方はブルームの出自であるユダヤ性の強い示唆である。ブルームの誕生日に幼いミリーは“moustachecup” (U 4. 283) (髭を生やしたイギリス軍人の必須アイテム) を贈るのだが、このエピソードはミリーの母方の祖父、すなわちイギリス軍人のエコーを感じさせ、モリーの家系からの見えざる影響もこのような親子のやり取りに見てとることができる。

ミリーの中には、両親それぞれ由来の特徴や要素が異種混雑性として見られ、それらは混じり合って渾然一体となるより、それぞれがその特徴を残しながら存在を主張している。ブルームもモリーも外国にルーツがあり、双方が相手の異国性に言及するが、モリーは自分の方がアイルランド人らしく見え、ブルームはあまりそうは見えないと考える (U 18. 377-78)。そもそも、純粋なアイルランド人とはどんな容姿なのか、どのような存在を指すのかという問題提起もここで生じるが、移民同士の互いへの意識は厳然としてあったということがユダヤ人に対するモリーの思考から読み取れる。作品全体においてブルームをはじめとする「よそ者への」視点・「よそ者からの」視点は物語の根幹をなすものである。ここには、個人の他者への向き合い方、共同体のあり方のヒントもあるだろう。そして、「よそ者」二人の融合した姿でもあるミリー像が未来に向かって着実に歩み出している姿にもそのヒントがある。Declan Kiberd はブルームが自身の中によそ者を見出す能力に長けていることを指摘する (313)。その上でもし誰もが自分の奇異を認識すれば外国人という概念は消え、よそ者になるだろうとする。さらに 19 世紀イギリスによるアイルランドの植民地主義、すなわち「アイルランド人に自国のよそ者という意識を植えつけること」に触れ、「自国のよそ者」という過去の植民地主義によって強制されたアイルランド人の負のアイデンティティを指摘し、アイルランドの多文化主義を論じる。ジョイスはこうした観点を『ユリシーズ』のブルーム一家、いわば「自国のよそ者」たちを通して提言していると考えられる。

第 18 挿話のラストシーンには、“the Greeks and the jews and the Arabs and the devil knows who else from all the ends of Europe” (U 18. 1587-88)が存在するような作品全体を包み込むモリーの夢うつつの世界が描かれ、混沌としつつも穏やかな世界が描かれる。この背景にあるのは、ブルームがモリーにプロポーズしたハウスである。モリーの思考では人々はあるがまま存在し、アイルランドのハウスとジブラルタルが空間も時間も超えて結びつく。この重ね合わせには、個々のよそ者的要素、目の前にいる他者があるがままに受け入れて理想の地に生きる姿が描かれ、モリーの過去・現在・未来が繋がっていくことが示唆されている。

参考文献

- Bazargan, Susan. “Mapping Gibraltar: Colonialism, Time, and Narrative in ‘Penelope.’” *Molly Blooms: A Polylogue on “Penelope” and Cultural Studies*, edited by Richard Pearce, U of Wisconsin P, 1994, pp. 119–38.
- Gibson, Andrew. *Joyce’s Revenge: History, Politics, and Aesthetics in Ulysses*. Oxford UP, 2002.
- Joyce, James. *Ulysses*. 1922. Edited by Hans Walter Gabler, with Wolfhard Steppe and Claus Melchior, Vintage, 1986.
- Kiberd, Declan. *The Irish Writer and the World*. Cambridge UP, 2005.
- Slote, Sam. “All the Way from Gibraltar.” *James Joyce Quarterly*, vol. 57, no. 1, 2019, pp. 81–92.
- Slote, Sam, Marc A. Mamigonian, and John Turner. *Annotations to James Joyce’s Ulysses*. Oxford UP, 2024.
- *本研究は JSPS 科研費 JP24K03719 の助成を受けたものである。